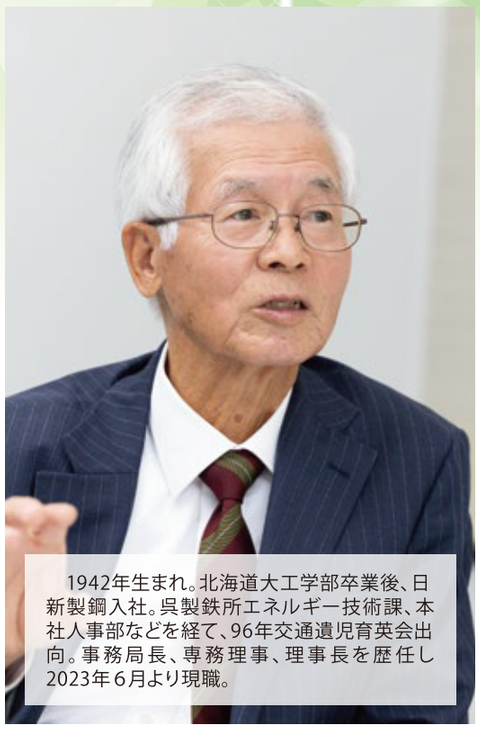
企画・制作／西日本新聞社メディアビジネス局

福岡のみんなの力で、飲酒運転ゼロへ。

命の重み見つめて交通事故をゼロに

交通遺児への支援を拡充 修学機会を最後の一人まで



1942年生まれ。北海道大工学部卒業後、日新製鋼入社。呉製鉄所エネルギー技術課、本社人事部などを経て、96年交通遺児育英会出向。事務局長、専務理事、理事長を歴任し2023年6月より現職。

公益財団法人交通遺児育英会は設立から55年、保護者が交通事故に遭ったため経済的に修学が困難になった子どもに、奨学金の貸与・給付の支援を続けている。同時に交通遺児がいない社会をつくるため各地の交通安全運動に協賛しており、飲酒運転撲滅を目指すTEAM ZERO FUKUOKA(チームゼロフクオカ)の一員でもある。人や車の動きが慌ただしくなり、交通事故が増加する年末年始を前に、交通遺児育英会会長の石橋健一氏と飲酒運転事故で2人の娘を失った井上保孝・郁美夫妻が交通事故と飲酒運転の撲滅、交通遺児支援について語り合った。

公益財団法人交通遺児育英会
会長
石橋（いしばし） 健一（けんいち） 氏

井上（いのうえ） 保孝（やすたか） 氏

井上（いのうえ） 郁美（いくみ） 氏

1950年生まれ。99年、飲酒運転事故で2人の娘を失い自身も大やけどを負う。妻郁美さんとともに飲酒運転根絶や危険運転致死傷罪の適切な運用、被害者遺族支援について提言を行うなどの活動をしている。

1968年生まれ。夫保孝さんとともに、飲酒・ひき逃げ事犯に厳罰を求める遺族・関係者全国連絡協議会幹事、高速暴走・危険運転被害者の会会員、犯罪被害者団体ネットワーク（ハートバンド）代表を務める。

「誰もが加害者になり得る」ドライバー全員が心に留めて

事故遺族の声を受け 1969年に設立

―交通遺児育英会設立の経緯を教えてください。

石橋 当会の設立は1969年5月2日です。当時は日本の高度経済成長期で、自動車の急速な普及とともに交通事故が多発。事故による死者が年間1万6千人を超えていました。保護者を亡くし困窮する遺児が増える中、「わが子を高校にだけは進学させたい」という遺児の母親たちの訴えが当会の設立につながったのです。高校生への奨学金貸与に始まり、現在は大学院まで範囲が広がっています。

井上保孝（以下保孝） 私たち2人も事故で家族を亡くす苦しみ、悲しみを知っています。99年、家族旅行の帰りに飲酒運転の大型トラックに追突される事故に遭いました。後部座席にいた3歳と1歳の娘が焼死し、私も背中と左腕に大やけどを負いました。

井上郁美（以下郁美） トラックの運転手は飲酒運転の常習者だったにもかかわらず、事故は過失罪で裁かれ、裁判で下った判決は懲役4年。奪われた2人の命の重さに比べあまりに軽い判決にがくぜんとしました。

石橋 交通事故というのは事故に遭った当事者、家族に大変な悲しみ、苦しみを背負わせます。その重大性を誰もが心に留めておかなければならないと思います。

五つの事業を柱に 交通遺児の学び支援

―交通遺児育英会の支援事業はどのような内容ですか。

石橋 「奨学金の無利子貸与（一部給付）」「修学支援金の給付」「奨学生の指導・育成、交流」「学生寮の運営」「交通安全の推進」という五つの事業が柱です。中心となるのが奨学金事業です。現在は返還不要の給付型奨学金の拡充に取り組んでいます。また今年からは、いわゆる浪人生も奨学金の対象としました。奨学金の他にも進学に伴う受験費用や自宅外通学生の家賃、運転免許や英語検定といった資格取得費用を「修学支援金」として給付しています。

―奨学生が交流する機会を設けておられますね。

石橋 年に1度東京で奨学生が集まる「高校奨学生と保護者のつどい」、全国5、6カ所で開催する「地域保護者懇談会 語らいカフェ」があります。交通遺児家庭という同じ境遇にある親子が集まり、将来の夢や今の悩みなどさまざまなことを語り合い、親睦を深めています。

郁美 同じ体験をした人同士でしか話せないこともありますから、そういった機会や場所はとても重要ですね。事故で家族を亡くすと、その日から生活は一変します。警察の事情聴取、裁判といった、ありとあらゆる非日常的なことに巻き込まれ、すごく孤独を感じるのです。

石橋 そうですね。「つどい」に参加される方々は話が尽きません。私たち育英会にとってはどのような支援が必要なのか、当事者の声を聞く場でもあり、その声が事業改革のヒントになっています。例えば学生寮「心塾（こころじゅく）」は、地方から東京や関西の大学を目指す学生の保護者の声に応えて開設したもの。心塾は東京寮と関西寮があり、寮費は朝夕2食付きで月1万～2万5千円。これであれば奨学金で何とかやっていける金額です。東京寮は老朽化に伴い全面的に建て替え工事を行っていましたが、今年の4月に正式オープンとなりました。寮名にもある「心」を大切にする人材の育成と、入居する奨学生の皆さんがより一層学業に励んでもらえるよう環境づくりにも力を入れています。

4月にリニューアルオープンした心塾・東京寮

郁美 それは大変助かるでしょう。私は毎年、警察庁の事業「交通事故で家族を亡くしたこどもの支援に関するシンポジウム」に携わっていますが、育英会の奨学生に登壇していただき、遺児としての体験を話してもらっています。

石橋 育英会でも交通安全推進のため、運送会社やタクシー会社に出向き、交通遺児の立場、その親御さんの立場から被害体験を伝える無料出張講演をしています。また、福岡県の飲酒撲滅運動「チームゼロフクオカ」をはじめ各地の交通安全推進運動に協力しています。今年の3月には外部専門家監修のもと、当会奨学生に対してウェブ調査を行い、そのうち15・8％が家族の世話をしている（したことがある）ヤングケアラーの可能性があることが判明しました。今回の調査結果については、奨学生のヤングケアラーとしての実態を深く理解する一助にするとともに（来年以降も継続的に実施予定）、当会の今後の支援プログラムの策定に活用していくなど、まだやるべきことはたくさんあります。

―井上ご夫妻が続けてきた活動について聞かせてください。

保孝 99年の事故の後、私たちは同じ思いの遺族らと一緒に悪質・危険な運転の厳罰化を求め、署名活動をしました。37万を超える署名が集まり、2001年に危険運転致死傷罪が新設されたのです。

石橋 全国で飲酒運転の危険性、悪質性を訴える講演もなさっていますね。

保孝 私たちが大型トラック事故の被害者だったことから、トラック事業の団体をはじめ、これまで全国のさまざまな団体でお話ししてきました。

郁美 飲酒運転の背景にはアルコール依存の問題もあるといわれます。依存症のドライバーの早期発見と治療や、アルコールの影響に関する若者への教育の大切さを訴える活動もしています。

石橋 厳しい罰則と同時に教育や治療、その両輪が必要ですね。

遺族の言葉を届け 交通事故ゼロへ

―飲酒運転に対する社会の意識は変化したでしょうか。

保孝 変化していると思います。飲酒運転根絶に向けて社会機運が高まり、厳罰化も進みました。飲酒運転による重傷事故・死亡事故はピークだった00年度から21年でおよそ10分の1にまで減少しています。

郁美 ところが近年は下げ止まりが続き、ゼロには至っていません。飲酒運転をしそうな人がいたら、家族や同僚など周囲の人とタッグを組んで止めてほしい。同時に、機械での抑止、アルコールを検知するとエンジンが始動しない「アルコール・インターロック」の普及も必要なのではないでしょうか。

―井上ご夫妻、交通遺児育英会の活動の「ゴール」とは。

保孝 車は便利ですが使い方を間違えば凶器となり、誰もが事故の加害者になり得ます。それを全てのドライバーに認識してもらうことです。

石橋 育英会ではドライバーの安全意識向上のため遺族の言葉をまとめた冊子を配布しています。また、一人でも多くの交通遺児を支援するために、私たちの活動をもっと知ってもらおうと広報に力を注いでいます。

郁美 遺族の言葉がより多くの人の心に届いてほしい。私たちは、飲酒運転はゼロにしなくてはいけない、ゼロにできると思っています。

石橋 交通遺児の方々は、奨学生として貸与を受けた奨学金の返還が人生での大きな負荷になっています。われわれは最後の一人まで支援を続け、全ての交通遺児が修学し、社会に出てから大きな負荷を背負わずに済むよう、返還負荷の軽減など事業を一層充実させていきます。そして講演などを通じて飲酒運転撲滅、交通事故ゼロに向け交通安全の大切さを訴え続けます。

［ 奨学金制度利用者の声 ］

大学生活は忙しくも充実。いつか支える人になりたい

5歳くらいのときに父を亡くしました。母が頑張ってくれていたからだと思うのですが、つらかった、苦労したという記憶はありません。

母は私が高校に進学するとき交通遺児育英会の奨学金制度を教えてくれました。高校卒業後の進路を決めるときも「行きたい大学に行きなさい」と背中を押してくれたので進学するかどうか悩むことはありませんでした。

今は国際関係の学部の2年生です。英語での発表やリポート作成が多くて大変ですが、今年の夏に3週間の語学留学をして、勉強への意欲が一段と高まりました。1年生の夏休みには自動車の運転免許を取得。悲しい事故を起こすことがないよう、初心者マークが外れても初心者の緊張感を持ち続けて運転したいです。

勉強にバイトに忙しいけれど充実した大学生活です。家族や友達、育英会の支援など、支えてくれた周囲への感謝を忘れず、目標に向かって頑張りたい。そしていつか支える人になりたいです。

（大学2年　山本日菜乃さん）

交通事故ゼロ、飲酒運転ゼロを目指して、無料出張講演を行っています。

交通遺児や保護者の方の体験を視聴いただくことは、交通安全の大切さを実感する絶好の機会となります。ぜひ、お問い合わせください。

交通遺児育英会は、50年以上にわたり、保護者が交通事故で亡くなったり、重度の後遺障がいのため、経済的に修学が困難になった子どもたちに、高校や大学・専門学校などへの進学を支援し続けています。修学を終えると、社会に役立つ人材として羽ばたいていきます。私たちの活動は大きく❺つの事業で成り立っています。

❶ 奨学金の無利子貸与（一部給付）
❷ 奨学生の指導および育成と交流
❸ 学生寮「心塾®（こころじゅく）」の運営
❹ 修学支援金の給付
❺ 交通安全推進運動への協賛・協力、無料出張講演等

交通遺児の今を支え、明日への道を拓く。
公益財団法人 交通遺児育英会
募金課 0120-521285 (平日9:00～17:30)
〒102-0093 東京都千代田区平河町2-6-1 平河町ビル3階
交通遺児育英会 検索
bokinka@kotsuiji.com